厚生新編

遠西本草攬要

七金譯說附録

大槻玄澤自筆草稿

同　譯稿

馬場貞由自筆草稿

洋学文庫
文庫8
A 10

文庫8
A10

大槻玄澤先生自筆
厚生新編草稿
外數點、自筆ニアラサルモノアリ

厚生新編巻之一

台命奉

和蘭譯官長崎馬場貞由謹譯述
仙臺藩臣大槻茂質謹參校

鰻鱺魚 阿蘭陀語「アール」と云ふ一名「ーリンギ」と名く

鰻鱺魚は生ずる水の海の生ずる水の清水の清水の川の内にも或は又海の内にも

さうるそう　これハ「ヒパラ」の類なり　右の位ニ曰く
ゲンゲ　魚の形と類ス　ヒパラ卿え
魚ゐいさらゝの類なり　其類二通りあり　其一ツ
を「ゲメーン・アハル」と云ひ　常のうなぎ　其二ツ　ミキール
「アハル」といふ　始をたちのう　其「ゲメーン・アハル」といふハ
始め黑茶色にして　容ハ其ごとく人ごとし　其ミキール
キール・アハルといふものハ背節ハ高くかどりて腹ハ
白くして白し　其後ハ次第ニ細くなりて　尾ハ
細長く　恰も蛇ニ似たり　口ハ小さく　目ハ
鼠ニ似たり　鰭ハ耳ニ　脇ニ　後ニ　つくばのうぬ

活きて捕る魚ハ仙人掌ニ似たり　ゆゑ
ゆゑ　時ハ甚ク　捕ル　物ハ　ハ　ハ
泥の中ニ多し　此のよみたる時ハ多ク　前
ゆゑ　ニ　ハ　の後ハ　の濁り
たる時ハ一度ニ殺ク　捕ル　ハ　魚し
捕ることハ　ハ　ハ　設ケ　種類
其ニ形狀　ホの　面白　略し　ホの
年若ク　若の書ニ　ゆつるなるべし
功能

はれ魚の油を用ひ一年よりそれ以上経たるを用ひ
又瘡の痛みはなはだしく或は瘡瘍
のあとよりうるおい絶えこれ絶命す又毛髪を
やいて能くのべ粉末にして飯鑛の
肝及膽汁を加へて婦人稚児を用ひ能く絶る
効あるなり此薬はうるおいの後絶命す
そもそもの子宮傷治めがたい脱肛の病
に用ひ効あり一切の秘法なりこれ又は皮
を焼て子宮を焼べ

いろ醫師敬て実験すべし所のみならず
はなはだの乾しうるおい所の毛を解禍のぬく
膝ちよりこの方面を肌につるくさとを色さ
はなるとなれば神経衰弱急となり物忘れを治す
を治す神経とは解體新書の説なり自ら試して実法
を有るのこと世の人号是法を大功絶たりと
いふ

○待詔といふ貝殻用ひ鍛鑛毎に生鑛の
魚を多く掬ふ法

其頃ハ國のもの共縄より毎の網漁法ひ外
たる和年りこれ漁用くらゐ五よ年の魚を
釣りはるを年り之ハ新工夫のものそハ古年
より人の能くなる為年所年り網れとも魚
しまく初たして細数寄の出ひ号の出よ
工夫をこらし往くよ思ひ漁費さんる漁え
のりてさらく其造りこと漁れ漁費と
ちをつ〇ひよけ及其川又湖沼をを
持ち行きれ中よ張る其若ち漁厭されハ

毎度数くの魚漁流りはるを出て経ひ年り
られを造ちれハ先ち出て第一の国漁考ふ
魚し〇は〇に〇ほの分ハ長さ一すをうり四ちく
ぎぎく漁つけたる網作りの絢年り梅ぎぎく
ちをを結ひ年り
麻糸年中んよ細きをちうを〇とちらみちり
者漁作りく其絢のぎぎく漁つける所よ
をつちと結ひ年をしられ漁用年紀
其絢よ ホールセイ 一名ブレ井 河第小魚の養年保ちり 或ハ大ひなる

蝦蟹又は小魚の類を仕掛置くことすべし
能く海濱及び河岸の流の中に在るブリッケン
梅よ此贊の類の形狀の大さ長さの様にて
用ゆる時は勝れたる利あり右糸のかくを
結ひとるべきこと（へ）（と）（ち）等の大綱にて備ふ
其漁猟せんとする海濱及河岸に到り
ちかき所に結ひ糸を右の大綱に大抵
弟子を引き完間を隔てて同の（は）（に）（ほ）
の等を以て示せる法ひ糸を垂し

作者の住所
姓名欠

厚生新編　生植類　巻之二

台命

奉

和蘭譯官長崎馬場貞由謹譯述
仙臺醫員陪臣大槻茂質謹參校

アルドアッペレン　一名タルトウヘルス

アルドアッペレン　一名タルトウヘルス　羅甸語にて、ソラー三六、五ベロ五六、エスキュレン五五」と名く

梅よ此物形狀功用を以て寡有なる其藩
[illegible]彼本草圖說を攷るに

△アルデヤスコッケヒ
オンテルデアールド

地賢も亦アルドアッペレンといふ物とい同名
異物なり。他書と考へるも
しかアルド・アッペレンハ百有餘年
以来南亜墨利加洲より種を移し来
たる植物なりと設けり又其本草の図
を見るに パタスト・アルド・アル斯
図状ニよる其艸諸なり 地賢の外古の
名物いとれなし但年編設く所アルド
スコッケンハ其艸諸のそなへすなる設く
アールド アッペレンハ今見る所の其艸諸の形状功

厚生新編生植部巻之八

奉

台命

大槻茂質 玄澤
宇田川璞 玄眞 譯校

白芷 羅甸アンゲリカ又ラ

遠西本艸攬要
巻之一
玄澤自筆原稿

遠西本艸攬要巻之一

遠西　列模（レム）曾（ベ）鹿（ル）会（エ）斯（ス）　獨（ド）度（ド）那（ナウ）烏（ウ）斯（ス）撰
日本　白河　石井　譯
同藩　瀧尾
島
山上　　仝校
大槻茂質　玄澤　參訂

○第壹　蘭山　○　○　曰　フジヨモギ　牡蒿一種

僊坮
空（ア）歇（ヘ）盧（ロー）擲（チ）

品類 地和思谷里迭斯（先哲名）曰此物二種トス即 雌ト雄トナリ
大ト小トヲ次テ其名ヲ合ツ又此二種ノ外ニ一種アリコレヲ俗
セテ三種トス但右大小二種ヨリハ形頗小芳香亦却テ稍
愛スヘシ

形狀 第一種 大乞歇羅擲ハ其生長ヲ極ルモノハ小樹或ハ
灌木ノ如クニ至ルモノアリ 挺出ノモノハ其高サ一箇長人ノ立
テルニ等シ幹枝ハ一拇指大或ハ尚厚太ナルモアリ毎莖枝条
極テ繁衍細葉（数多）剪切（キリコミダル）スル者ノ如シ其色白キガ如ニメ灰色ヲ帶フ
其香重シ然レ𪜈甚タ喜ムベカラストスモノニモアラス冬々時ハ枯凋シ
四月 二至テ再ヒ宿根ヨリ萠生スル一他ノ諸木ノ苗葉

馬場と貞由自筆

七金譯說附錄卷上

甲曰 汝鍊坑ヲ見ルヤ如何予ハ汝ヲ親ク
視セ〳〵シ命〳〵置キ給ヘリキ
乙曰 予始メ悉ク見ル能ハス得タリ君の懇切
なるを今謝〳〵盡サンと能ハス
甲曰 汝ヨ汝れを見てへ〳〵予命を下〳〵置

まくめり を汝悉く巡見しめるなんや否

乙曰　予先づ最初に二處ほど鑛鋼を堀出せり其堀出せし鑛鋼を皆色黑くして質燥きしめり是を一處ほど搗きて末となせり是を水飛して鎔化せるとなり又一處ほども搗きて末に混じ土砂を分離除去せんが為にして四尺方にして深さ二尺程の平なる器に其末を納めて流水に打ゆせ其中に絶へず

攪匀せり此術に鋼砂を器底に留め土気を其流水の勢に随て流し去るなり此鋼砂を取て鎔化せ但し鋼砂十五トン（按に一トンの重さ二百五十六貫目にいたる）を鎔化せるには木炭六十トンを燃せ得る所の鋼二千五百斤或は三千五百斤にいたると此國（按に拂郎案國と作す）に偶く鋼山を見出せは其人に意に任せて堀るを許し税を納む其人に害なきやうにふ一トンを以て僅に二分五厘を取

不見國人ノ此業ヲ勵(励)まして自ら益(益)ヲ得ん
ん為なりと偖其鑛錫ヲ鎔化するは其鑛錫の
一分程のウール（按ノ此品詳なる追考すべし）を如ク然らされば
好く鎔化することなし（召共）汝此所以ヲ知るや（ヤ）
甲曰　ウールを多く錫気と帯ひめる物（なる故ノ）
見を如くもの（者）を當ノ其錫の殖（多）ふのみなるに尚速
ノ鎔化（解）されなり偖鑛錫ノ帯ひめる土砂を右
ノ云ふ如く水飛して大概（概）を去るとも尚存（遺り有）する之
昂錫の鎔化（解）する時ハ沸騰して火の波ヲ見る
如く鑪壺（坩鍋）中ノ流動する物を砂と塩気なり又（其）黒
色の灰粉となるく其上ノ浮き出（升）る土気なり
此土砂（ものゝ）も塩気を毎ノ上ノ浮み（ムカヒ）錫を其下ノ
沈めり（むもの）此土気の混和せるの多少ノ因く錫の品
位を異（比）なるなり昂土気混和（交）すること愈多（く）なれば
其錫愈粗（く）して脆く且堅くして悪（粗）品となる此
ノ又（其）土気の混和（交）すること少き錫を質密實（細）

て軟く純粋にして鋼鍛よ近く鍛物を
度く又よく捲む度に此土気を除き去るは
砂とウールの塩を以加へて鉛化するなり然る時
は砂石解けて硝子状となり土気自ら其内
よ集る(聚)なり但ウール(河)得難き時は水中白石或
は川砂を用ても又灰粉を以代用(或)
るべし然れども灰は原燒化(ゆ)して土なれば
此を用ひる時は土を加へて理(ことわり)を及(却)て

るるの事といへども無
さるるの道はよるべく度く生知さる所より
強てまれなる推し考へ譯説を作るとあれを
或は語る所もあれども戰慄恐懼の色ふ拾さる
所なり然るに生徒は此の生業(ショウギョウ)を他の生業(ホカノショウギョウ)
を修めて事ふ熟せざるの門家(ショウノシンカキヨウワモノ)と如何(ナニ)
金議せいの心を解を得ざる又其人(ソノヒト)
を為(ナリ)熟せざる所(ホントニカテシガフノ)の要(ホントニコトハイフアニバイヲ)を以て新得(シンテイ)の器(ジンテイノミニコミカテシカリ)
を以て(ホントニ)
まるるを雀(ヨロコフ)躍まるるを自由(ユヨウ)に等し

河輪自或ハ工巧測量法式の類様〻事件の数
く皆共日夢て弄出ること多く踏偏ふ者〻
事ゆる毎〻紙上物産の類を茂質
と和漢〻紙上の論ふ毎事を学ふ従事
〻〻頗る得る所ありて翻語
毎きう思ふ迄大ふ
一
草木金石等の説第和漢ふ〻〻
或ハ和漢の説無者或ハ
たゞ〻説ふ云ふ書定の物もの説 且 蒙生

和文
此説ふ作ふ者の和やふ
に作ふ同人ふ生新方
生ふ様に作ふ下ふ
第ふ稿文如ふ作ふ
ふけ〻ふ和
ふ生ふ〻ふ和
の和ハ以説ふ

原田謙太郎
珍藏